県立高校あり方検討会議　工業部会
意見のまとめ

令和８年１０月２２日

1　目的

千葉県における県立高校の今後のあり方などについて学識経験者や教育関係者、産業関係者から意見を聴取するため、県立高校あり方検討会議を設置した。

2　委員の構成

氏　名	所　属　・　職　名	備　考
藤本　靖	千葉工業大学工学部　電気電子工学科　教授	学識経験者
安田　国士 高嶋　聡明	県立千葉工業高等学校　校長 県立京葉工業高等学校　校長　※第３回のみ交代	教育関係者
下須賀 和実	船橋市立七林中学校　校長	教育関係者
紀 高志	千葉職業能力開発短期大学校　校長	教育関係者
松本　泰之	丸善石油化学株式会社　事務部長	産業関係者
大吉　弘 大吉　輝	ビルテック株式会社　代表取締役 ビルテック株式会社　専務取締役　※第３回のみ交代	産業関係者

3　検討会議のスケジュール

＜第１回＞

・日時　令和８年６月４日（木）　午後２時から４時

・場所　千葉県教育会館本館７０３会議室

・議事　（１）県立高校あり方検討会議の趣旨

（２）学校数の推移等について

（３）県立高校改革推進プランについて

（４）県立高校の現状について

（５）その他

＜第２回＞

・日時　令和８年７月９日（木）　午後２時から４時

・場所　千葉県教育会館本館７０３会議室

・議事　（１）工業科・コース設置校の学びの分類、進路状況について

（２）工業科設置高校建物状況・備品状況について

（３）他県での工業系高校の取組例について

（４）N-E.X.T.ハイスクール構想における改革先導拠点の取組について

（５）今後の工業高校のあり方について

（６）その他

＜第３回＞

・日時　令和８年７月２４日（金）　午前１０時から１１時３０分

・場所　千葉県教育庁企画管理部会議室

・議事　（１）県立高校の魅力向上に向けた中学生・保護者アンケートについて

（２）今後の工業系高校のあり方について

（３）N-E.X.T.ハイスクール構想の普及について

（４）これまでの意見のまとめ

（５）その他

４　検討会議での主な意見

（１）学校数の推移等について

・高校見学に行く生徒や保護者は非常に多く、教員も見学に行くことが多い。その中で、私立高校と公立高校の環境整備には格差がある。公立高校にも良さがあることは分かっているが、その魅力は保護者にはなかなか響いていない。

・生活環境が良いということは、学生にとっても非常に良いことである。

（２）県立高校改革推進プランについて

・小中学校の段階からものづくりにチャレンジする機会を増やすことが大切である。

・工業高校に足を運んでもらう機会を増やす必要がある。工業高校に限ったことではないが、施設や設備に魅力を感じなければ、その学校が良い学校だとは思われにくい。

・普通高校も含めて、学校が綺麗で生活環境を整えることは重要である。そのうえで、工業高校では、AI 搭載の産業用ロボットなどを操作する技術者を育成するための最先端の実習機器を導入することも魅力に繋がる。

・将来の進路に繋がるような興味や関心をサポートできるシステムがあれば、理系に進むきっかけになるのではないか。

・学生時代に、チームで課題を解決する経験や、その過程で気づきを得る経験をしてほしい。また、企業は成長し続ける人材を求めている。

・大学に行くことだけが正解ではなく、それぞれの能力に応じてしっかり稼げる仕事があるという視点で考えることも大切である。

（３）県立高校の現状について

・魅力ある学校にするために、学科名やその内容を時代に合わせて変えていくことも含めて、議論や意見を出しても良いのではないか。

・工業系の学校は、卒業後の大学との連携などについてアピールするべきである。

・工業高校に魅力がないのではなく、その内容がよく分からないため、とりあえず普通科を選ぼうと考える人が多い。

・女子生徒をどのように増やしていくかが課題である。工業系には男性の職業というイメージが強いため、小・中学校の段階からの教育が必要である。

・連携の一環として、工場見学やインターンシップ、必要であれば出前授業を行うことができる。また、コンビナートの多くの企業が協力できる体制にある。

（４）工業科・コース設置校の学びの分類、進路状況について

・単独校が４校、他学科との併設校が４校、コース設置校が２校となっており、地域のニーズに応じた特色を打ち出す工夫を考えている。

・工業高校から大学へ進学する生徒の多くは、指定校推薦や総合型選抜を活用している。

・大学との連携や工業研究会での協力など、発展的な取組を行っている。さらに、実際に大学で何を学んでいるのかを感じ取ってもらう機会を作っている。

・インターンシップを受け入れても、生徒たちが希望するのはコンビナート内の大手企業が中心である。協力企業として時間と費用をかけて教育しても、結果的に大手企業へ就職してしまうため、ミスマッチやコストの問題が生じている。これは他の企業とも議論になっている課題である。

（５）工業科設置高校建物状況・備品状況について

・施設や設備については、「一気に新しく」を行えればいいが、それは難しい。

・電子計測器などはインターフェースがどんどん変わるため、技術の流行が変化した際には更新していく必要がある。学ぶ側も、それに合わせて知識や技術を更新していくことが良い。

・施設が古く、いつ壊れてもおかしくない状況である。壊れた場合には、教員が部品を作り直して対応している。

（６）他県での工業系高校の取組例について

・保護者や生徒にとって、進学やその先の将来をイメージできることが魅力の鍵となる。現在の子供たちは１８歳ですぐに就職したいという意識が強くはなく、生活が安定していることもあり、もう少し専門的なことを学びたいと考える生徒が多い。
・工業高校で専門的な勉強をすることで、普通高校から大学へ進学した人とは一歩先を行くような、確かな技術や専門性を身に付けられるという評価を得られることが理想である。
・人材育成の仕組みを国が整備することも良いが、地元企業と人材のマッチングが円滑に進むことが望ましい。
・他県の工業系高校のような取組を行っている学校の存在は、生徒にとっても保護者にとっても将来像が見えやすくなるため、安心感につながり、受検者の増加も期待できる。

（７）N-E.X.T.ハイスクール構想について

・学科横断で学べることは魅力に繋がる。AI・ロボティクスコースのように今後ますます発展していく分野において、子供たちが既存の枠にとらわれず柔軟に学べる環境があることは、それぞれの好きなことや得意なことを伸ばすうえで素晴らしいことであり、時代のニーズにも合っていると感じる。
・大学や専門機関と連携しながら質の高い最新の学びが得られることは、保護者や子供たちにとって大きな魅力である。
・工業高校は専門的な知識や技術、スキルを身に付ける場であることから、このような課題解決型の学びが実現できれば、生徒にとって学習の意義がより明確になり、工業高校の魅力向上にも繋がる。
・実際の利用者や地域、企業との対話を通じて課題を発見し、解決に向けた仮説の検証を繰り返すプロセスを重視することが重要である。
・今後の教育課程を編成するうえで、各コースをどのように運営していくのかが課題である。また、教職員の負担が大きくなる可能性も懸念している。
・「探究ラボ」の整備による設備や施設の充実は非常に意義がある。最新の設備や機器が導入されることは、生徒の学習環境の向上に繋がる。
・取組については、中学生に対してどれだけ分かりやすく伝えられるかが重要なポイントになる。

・保護者の理解は進路選択に大きな影響を与えることから、専門分野の魅力や将来性について、保護者にも伝わる形で情報発信を行うことが重要である。
・新たな教育プログラムを実施するためには、設備や予算だけでなく、実際の運営を担う人材の確保が重要となる。
・こうした取組を推進する学校に対して、県として特別な人員配置や支援措置を行う仕組みが必要である。
・教育課程については、中学校、高校、企業、大学がそれぞれ柔軟性を持ちながら連携し、時代や社会の変化に対応していくことが重要である。

（８）今後の工業高校のあり方について
・新たなタイプの学校への再編も魅力ある学校づくりの一つだと考える。そのため、今後も積極的に進めるべきであり、老朽化対策と ICT 改革は優先されるべきである。
・中学校の現場において、周囲の大人が背中を押すことができれば、工業系を目指す女子生徒は確実に増えると考える。
・工業系の魅力をどう伝えるかが非常に大事である。工業系に進んだ後にどのような進路があるのか、その先でどのように社会に貢献し、自分の仕事としていけるのかをしっかり考えていきたい。
・今後は、工業高校からも大学に進学できることや文系大学にも進学できることなども含めて伝えていく方がよい。
・プレゼンテーション能力など、大学や社会で求められる資質・能力の育成を進めてほしい。
・今後は、大学だけでなく教育機関で「仕事に必要なスキル」を教えていることが明確に伝われば、企業も「ぜひ来てほしい」と考えるようになるはずである。
・工業高校において必要とされるキャリア教育が明確になればよい。
・建築、電気、土木、設備、IT といった各分野において、企業が新入社員に求める基礎知識を在学中に先行して教育することは、今後の高校や大学の教育における特色づくりに繋がる。
・一部の教科において柔軟性のあるカリキュラムを導入し、１学期の一定期間を使って実践的な学びの機会を設けることが有効である。
・生徒が将来なりたい職業や目指す姿に応じて複数のコースを選択できる仕組みにすることで、自ら学習内容を組み立てられる教育環境の構築が可能となる。

・中小企業の協力を得て、現場の実務担当者や経営者に講師として登壇してもらう方法も有効である。
・人材を必要とする企業の担当者が直接教壇に立ち、現場で求められる知識や技術を分かりやすく指導することで、生徒の職業理解を深めるとともに、企業と生徒の接点を早い段階でつくることができる。
・工業高校の施設老朽化は非常に深刻な課題である。十分な予算の確保が前提となるものの、新しい学校づくりや魅力ある教育環境の整備は今後ますます重要になる。
・魅力ある工業高校を実現するためには、教育、施設、生活支援を一体的に整備していく必要がある。
・生徒が主体的に学び、その成果を他者に伝えることができる体験の機会を、さらに増やしていくことが望ましい。
・他県の生徒募集に成功している工業高校の事例を参考に、教育内容や取組によって多くの生徒を集めているのか、どのような特色が評価されているのかを分析し、その成功要因を取り入れていくことが重要である。
・老朽化する施設を考えると、現在の千葉県内１０校の工業系高校は、どこかのタイミングで集約し、教育設備の改善や最新化、投資箇所の集約を図る方が、千葉県内の工業系人材の増加に繋がるのではないかと感じる。
・工業高校の生徒が中学生と協力して活動したり、ミニ先生として教えたりするなど、双方向のつながりをつくっていくことが魅力に繋がると感じている。